

## 第七話 昔の排水、昔の生活、昔の東京

熊井知次

## 一、家庭排水と火の用心

昔から恐いものは、地震、雷、火事、親父、言われ、火事は人災として恐れられ、人々が最も神経を使ったもので火元ともなれば地域に住めなくなるほどの経済的、神経的にも大きな打撃を受けるほどであった。

この為に昔から火を使う場所には、様々な生活の知恵が使われていた。此れからの話もその一例です。場所は東京都中野区の鍋屋横丁で（現在の中野区本町四丁目）で大正末期から昭和二十年に東京大空襲で焼失するまで実際に使用していた施設です。

火災防止、防火用水、排水の浄化を纏めて考え造られたあの家の排水の話です。

鍋屋横丁は、江戸時代から宿場町として栄えた内藤新宿（現在の新宿）から程近く、厄避け祖師として参詣者で賑わった妙法寺が近くに在り、明治時代の中央線の開通で、駅

にも近く表通り（青梅街道や中野駅までの道）には、商店、映画館等が立ち並んで盛り場として栄えた地域であり、此の鍋屋横丁で、青梅街道から西側に入った所で中野消防署の直ぐ裏側に当たる所にあつた菓子卸を商売にしていた家の排水設備の話です。

此の家は、当初商売を始めた頃には回りにも家も少なく畑に囲まれていましたが、東京の発展とともに周囲にも、当時で言う文化住宅的な住宅が段々と増え、此れにより商店街も形作られてきましたが、火事でも起きると当時の消防力のことでずから自分の家は勿論、風向きによって近所に迷惑を掛けることが多かつた。商売柄、人の出入り、荷物の出入りも多く、雇い人も多く使っている為に当然水の使用量や火の使用方も頻度が激しかったので火災を非常に気にして、我が家から出火はさせまい、排水の汚れで近所に迷惑を掛けてはいけない、との気持ちから此の設備を造つたらしいのです。

まず、家のあった場所ですが、青梅街道の鍋屋横丁交差点の西側で中野消防署の裏側に当る場所です。

建物の周囲は住宅に囲まれ、表通りの青梅街道沿いに商店街があるほかは、此の家と、隣の飴の製造業をしている式軒だけが営業している建物で、入って左側が事務所、その奥に入り突き当たりが倉庫、左に曲がった場所に住宅があった。

此の住宅の台所、風呂等を結んだ排水が先程の話しの設備です。

建物の間取りや施設の形等は、図—1、2のようになっています。

その特徴を説明しますと次ぎのようです。

#### (一) 台所

当事の習慣としては、今と違い従業員は住み込み制度、所謂丁稚奉公で、衣、職、住、は雇い主持ちで休暇は年に二回、お盆と正月に限定され年数が開けるとお礼奉公して独立の手順ですから、普通の家と異なり住み込み勤め人と通勤してくる人達の食事を全て調達しますから、此の為に調理片付けをする住み込みの女の人を雇っていました。此の為台所や風呂付近の設備は一般家庭と異なり規模も大きく、使う水の量も馬鹿になりませんでした。

配置で説明しますと、飲料水は昔は井戸が主体で共同井戸が大半でしたが此の井戸は年代は不明ですが水道が普及され

るまで主要な水源として使われ、その後も家屋が空襲で焼けるまで使われていました。

流しは「立ち流し」「座り流し」の両方があった。其の間に掘り抜き井戸があってポンプが設けられていました。食事は主家の家族は奥の部屋で、従業員の隣の板の間で箱膳を使って食事をした。大人数の食事の仕度と後始末ですから出出す廃水の量も汚れの度合も多く、その低流せば下流の廃水は相当汚れていきます。

#### (二) 風呂

次に風呂ですが、当時は今のようない「ガス」、「灯油」の風呂は殆ど無く大半の家が「石炭」「薪(廃材も含む)」「煉炭」等ですが、此の家では五右衛門風呂を設け燃料として薪や商売柄大量に出る「可燃ゴミ(木箱や段ボール箱)」を使うと同時に、燃料効果を高めるのと、江戸時代初期頃から使われたと言われている鉄砲風呂(鹿島出版社発行「風呂の話」参照)方式で洗髪や上がり湯に使うために設けた湯沸かし釜の熱源として排煙の熱を用いたり、洗い場での排水は貰の子が敷いてあって使った水は下に落ち、排水溝に流入する構造となっている。

#### (三) 防火用水

此の台所から出される廃水と風呂場の廃水を「箇所」に集め、

(図—1、2参照)

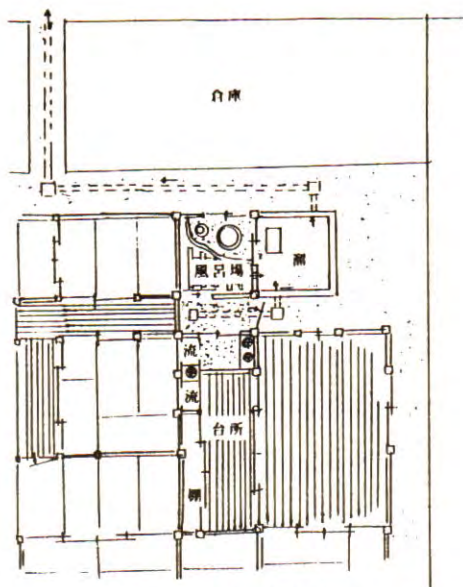


図-1 建物の間取り

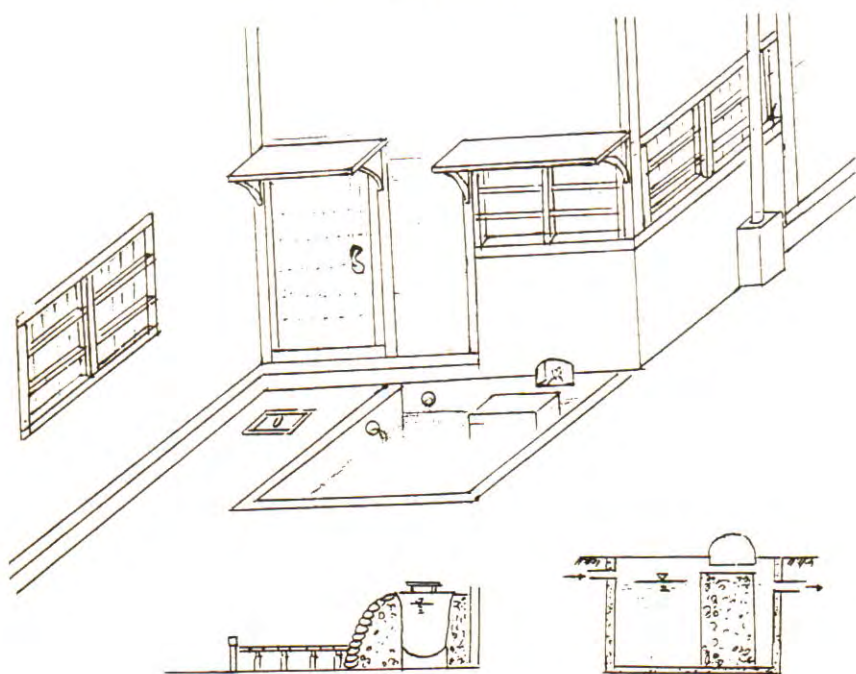


図-2 施設の形

沈殿放流で上澄み水を流すのと、風呂の焚口から落ちこぼれる「燃え滓」の火の用心の為に造られたのが図—2に示す溜め池施設です。

風呂の焚き口の周囲を掘り下げ溜め樹の大きなものを造り、台所と風呂場の廃水が全てこの溜め樹に集まり、沈殿させた後に上澄み水を道路側の排水溝に流す設備です。又溜め池の内の焚口の場所は人の乗れる台を置き風呂の火を見る様に成っていました。此の為風呂の焚く口から落ちる残り火は水に落ちて消えてしまい安全であり溜まっている水は緊急のときには初期防火の用水として汲出して使い役立たせるように造られて在りました。此の施設は戦後の混乱期に持ち主も故郷に帰り他人の手に渡り現在ではその跡形は残念ながら全く残っておりません。

## 二、生活と排水

これは東京の麻布区（現在の港区）で使われていた共同水道や、共同井戸と地域排水の話です。この一帯は商人、職人、勤め人等が混在して居住していた地域で江戸初期に既に幕府の施設や旗本、大名の屋敷があつて江戸の一画となつていた場所です。今度の話しの場所はその内の麻布十番と付近の二箇所の話です。麻布十番付近は南と東に新宿御苑を水源地とする古川が流れ西と北は緩い丘陵地で囲まれた地域で、高台には古くから大名屋敷や神社仏閣が多く、明治に成つて

からは旧財閥系の屋敷や天文台、各国大公使館が立ち並ぶ高級住宅地で、低地部は商業を中心として、それを取り巻き職人、勤め人の賃貸の長屋が立ち並び昔から繁華街として栄えた地域で、特に麻布十番は江戸時代に既にその名が出て、大正から昭和の初期には、寄席や縁日が立ち並び、現在ではテレビで紹介されるように毎年八月に行われる地域の鎮守様である末広神社の夏祭には、周囲の高台に住んでいる世界各国の人達も参加して国際色豊かなイベントが開かれるなどして繁栄している地域です。

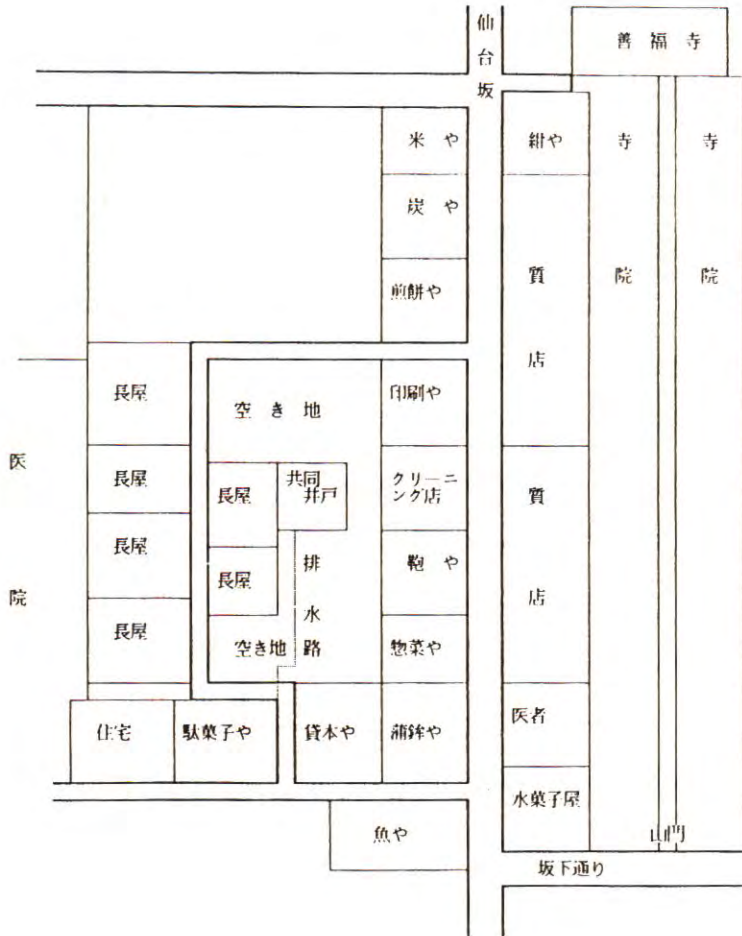
この地域で大正時代から昭和の二十年代までに在った「長屋の共同水道と排水」と「商店街と裏側の長屋との混然とした生活のなかでの排水」の話です。

### (一) 長屋の排水と共同水道

最初は麻布区竹谷町（現在の港区西麻布一丁目）の一角に在りました裏長屋の共同水道とその排水ですが平面図—1（次頁参照）に、その配置の概要を表わしてありますが、長屋の中心に共同水道があり丁度昔から言われている井戸端会議の場所に成つて居ました。

長屋の建つた時期や水道の引かれた時期等は不明ですがそこに使われていた水道の供用栓に就いて、昔使つた人の話を聞きますと、東京市時代に明治末期の水道事業開始のときに、英国から取り寄せたものを原型として日本で製作したものを

平面図-1



水道の規格品として採用した「竜号」、「亀号」の二型式の内  
の「竜号」と称していた自動止水方式の共用栓らしく、東京  
都水道局の資料からも、明治末期から大正時代に掛けて大量  
に製造、設置された共用栓で、現在東京都水道局にも現物は  
保管されておらず僅かに民間の人が持っている二基のみで、  
写真1-1、は東京都水道記念館に展示されている複製品の写  
真（東京都水道資料室資料より）です。

この地域は西北部の高台で昔から高級住宅地が多くあり、  
続く北側には江戸末期に浦賀に來航したハリス公使が最初に  
江戸に開いた公使館として使われた善福寺という寺があり、  
西には仙台藩の屋敷跡があつてそこには繋がる坂の名前に仙  
台坂として今でもその名が残っています。

共同水道を中心とした長屋の生活ですが、概略の配置を説  
明いたしますと（平面図1—参照）西南の道路から入った左  
右に平屋建の長屋が並び、真中が広場で道らしき物は特に無  
くその仮反対側に通じており、住民の多くは職人的な人で、  
所謂江戸っ子の氣質を持った人で「宵越しの銭は持たず」  
「江戸っ子は五月の鯉の吹流し口先ばかりで腹はないし」と  
か言われる様に、悪つけのないカラッとした氣質の人達が住  
んでいました。長屋の造りは平屋建で図1—3のような間取り  
で、入ったところが土間と板の間で玄関と台所が一緒になっ  
ていて、図1—4のように座り流し水瓶、竈が置かれてその奥

が二、三室と押し入れ、手洗い等が配置されていました。

廃水は流しの直ぐ下に落ちて建物の外側に建物の根太の下  
を通って側溝に入つて流れていつたようですが、放流先に就  
いてははっきりしませんが多分広い道路に入っていた下水管  
であつたと思われまふ。

当時の建物の基礎は今のような布基礎ではなく図1—5のよ  
うに玉石等を柱の下に置いた基礎でしたから、根太の下を簡  
単に通す事が出来るように成っていました。

広場の真中にある共同水道の使い方と家庭の排水の關係で  
すが、各家庭は洗いや、料理の大まかな準備は共同水道の  
ところにある流しにして、家庭内の座り流しでは最低の仕上  
げの調理をするだけですから、材料を無駄にしないことも  
あつたでしょうが、余り大きなごみは出ないようでした。併  
しどうしても多少は出ますので家庭の流しから外に排水する  
ときに、皆で使う排水路を汚さない様に排水が外に出るとこ  
ろに流しの下に金網を入れたりして注意していました。共同  
の水道や排水路は時々皆して掃除をして綺麗に使えるように  
していたようです。

共同水道の使用料は、資料によりますと当時の東京市の水  
道料金は表1—1の様になっていて大家さんが代表者になって  
一括して払つた様ですが、金額に就いては大家と店子との間  
で使用料等で若干トラブルは起きていたようですが、地域ぐ

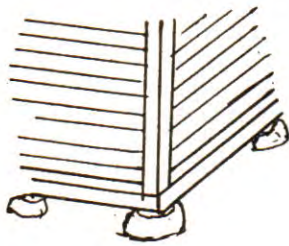


図-5 玉石の基礎

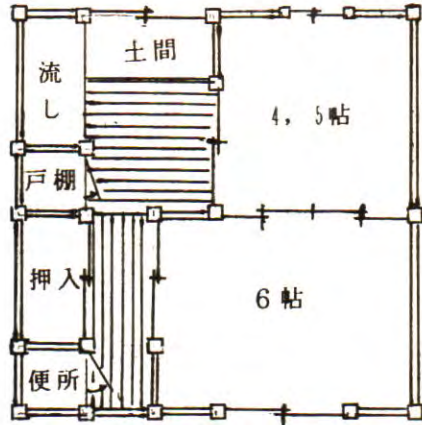


図-3 長屋の間取り

るみで共同水道や排水路を奇麗にして生活環境をお互いに譲り逢う気風は終戦までに残っていて生活を守って居たようです。

現在、この場所は第二次世界大戦の空襲により焼失して、その後、土地区画整理事業等が実施されたために原型は全く失われています。

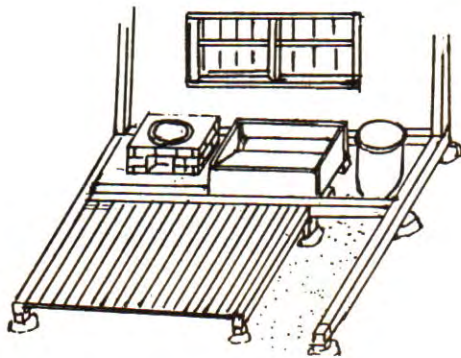


図-4 長屋の台所



写真-1 共用栓



## (三) 住民生活と排水

次の話しは前の場所とは周囲の状況も若干異なり商店街に囲まれた長屋で殆ど住民が勤め人が多く住宅と商店が混在していた地域の共同井戸と排水の話です。

場所は東京市麻布区網代町から坂下町（現在の港区麻布十番）に掛けた地域で昔から麻布十番の名前で知られた地域で、表通りの商店街と其の裏側に建って入る住宅とが混然として雑居して共通の排水路を使いお互いに生活を護ってきた話です。

場所を詳しく説明しますと、麻布十番通りの中ほどから南に曲がった網代通と坂下通に囲まれた十番通に近寄った地域です。（平面図——（次頁参照））

それぞれ二本の通りは商店街が立ち並び其の裏側の区域は、職人や勤め人が借家として住んでいた二階建、平家建の長屋

表一 東京市水道料金表

計量給水	放水給水		種別	料 金
	市設共用給水	私設共用給水		
三銭／一 <sup>m</sup> （年纏め）	無料（道路振に設置）	八円／六戸／年／一栓 一戸増五十銭増	専用給水	五円／一戸五人／年／一栓 五人増式円増し

が並んでいました。

十番通りから網代通に入って二軒目のところの横町を西にはいる幅三尺位の狭い道がありますが、そこに入ると丁度真中辺に共同井戸があつて、周囲の住民達の井戸端会議の場所、食事の下造や洗濯等に使われ、又子供達にとつても其の付近は手頃の遊び場で、夏など井戸水は渴いた喉には素晴らしいと感じました。

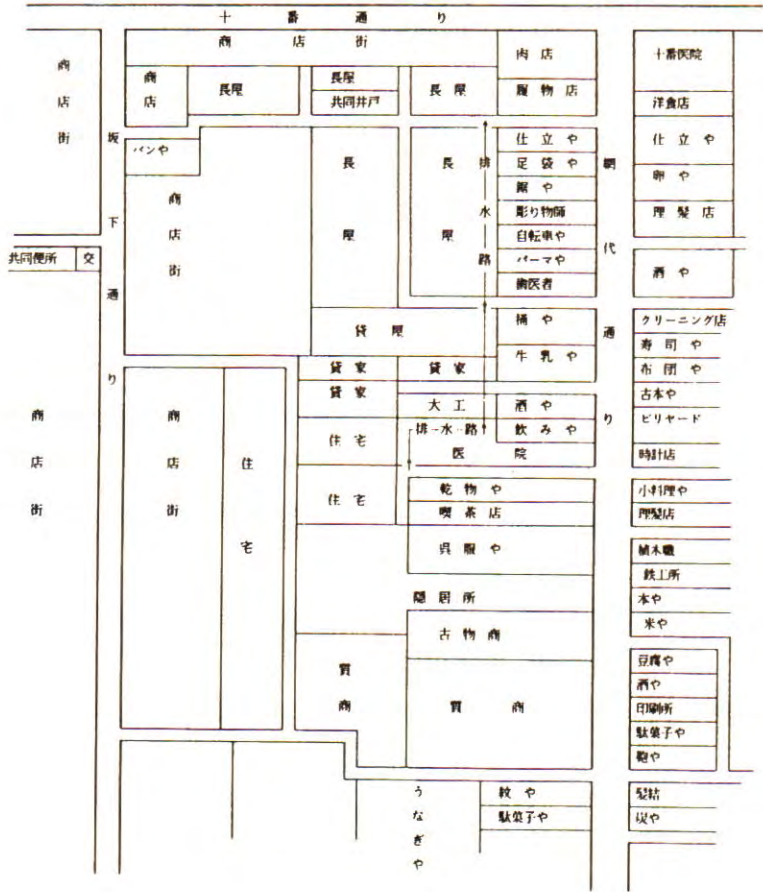
この地域の生活（建物、排水、日常生活）はこのようなものでした

まず建物ですが、当時は今の持屋指向と違って商店や住宅も其の殆どが家を借りて商売したり住んだりしていました。自分の家を持っているのは長屋の持ち主や従業員を多く使っている大きな商店等の地主級や特殊の仕事について入る人達に限定されていました。其の為普通の商店は商売の規模の変化に応じて店の借り換えを簡単に行い其の時々々の状況に会わせて店構えをするのが普通でした。

此為商店の建物の大きい店は一戸建、小さな店になりますと一棟を数軒に別けて小さな店では間口一間半位のものもありました。殆どが二階建て一階が店舗と台所、便所等があつて商売用が主であつて、家族の生活は二階に数室あつて寝泊まりに使っていました。

住宅のほうは、種類が種々あつて「一棟一戸建て平屋又は

平面図-2



「二階建」「一棟敷戸建」の建物があって、此の地域ではそれぞれ混在して、大半が二階建て平屋は地主、大家等の住まいが主で、その外には数は少なかつたですが貸家もあって、平屋の貸家は塀などで囲まれ殆どが裏の引込んだ地域に建てていました。借家人も勤め人または職人でも一本立ちの人達が多かつたようです。長屋風のほうの貸家になりますと若干階層も異なり、所謂庶民的な人達が多かつたのですが、それが生活をさらけだしてしまいました。当時は貸家は当然のように考えている時代ですから生活状況の変化に応じて転居する人も結構いましたが、数代に渡り住んでいる人も数多くあり新旧混然として生活してました。

そんな事でお互いの家族は皆仲良く家族的付き合いですから、子ども達が悪い悪戯でもすれば何処の大人でも注意しますし子ども達もすなおに受け入れてました。又お互いの家が家族のようであり子ども達も兄弟のように暮してましたので昼食などは、お腹が空けば何処の家にいてもその家の子ども達と一緒に当然のような顔をして食べましたし、大人の人も自分の子どもと一緒に扱って食べさせてくれました。このような雰囲気でしたから、商店の人も住宅の人も、大人も子どもも、地域全体がお互いに助けあって生活を守る一定の習慣が自然のうちに定着して周辺環境が維持されてきていました。

生活のなかで幾つかの習慣を取り上げてみますと

#### ①共同井戸

当時此の辺は各戸に水道が始ど入っていましたが此の地域の丁度真中辺に（平面図―二を参照）誰が持つていたのか不明ですが掘り抜き井戸があって、昔は多分釣瓶式だったとおもいますが昭和の始めには蓋もされポンプも据えられていて危険はなく安心して利用できるようになっていました。井戸の周りは余り広くはないのですが手頃の空き地になっていて大人達の井戸端会議の、子ども達には遊び場として皆で便利に使っていたが、何時誰が用意するのか判りませんでした。水が水を飲むためのコップが用意されていたり、綺麗に掃除されてました。周辺住民の生活に一体となって溶け込んでました。

#### ②家庭の排水

当時此の辺の排水は表通りには管が入り舗装もされてましたが、裏側に入りますと殆ど舗装もされてなく、図―6のような「コの字」型をした陶製の排水路、U字溝方式、あるいは木製の水路等で家の間を抜けながら各々の排水を表通りの排水管まで運んでました。

此の為排水路の掃除、壊れた場所の修理、大きなゴミの始末等、地域ぐるみで守ったものです。排水路の掃除などは子ども達の仕事で朝学校に行く前に家の回り、付近

の道路と一緒に掃除をしてからでないと食事にもならず日課として、ごく自然に動いていました。又壊れたのを見たら大きい子は治しておくとか、材料にしてもその辺の残材を持って来たりして修理したりお互いに注意しあっていました。

当時の各家庭から出る排水は今みたいに物が豊富で使い捨て時代と違い食べるものは大事にしていますし食物の屑は排水路にやたらに捨てると排水路が汚れ結果としては自分達で後始末ですから「食物は残さない」「落とした食べ物は拾って食べる」食事を残せば勿体無いと怒られ全て綺麗に食べることや、料理の材料にしても大根などは葉は漬け物や味噌汁の実にしたりして殆ど捨てることもしませんでした。このような生活ですから、各

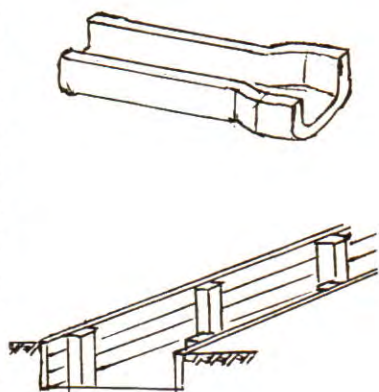


図-6 排水路

家庭から出る排水の量も質も現在に比較しますと非常に少なかったのですが汚れを少なくするために小まめに各人が掃除を行っていました。道路に入ってる側溝の掃除したごみは道路に置きましたが砂利道ですから水分は浸透しますし簡単に天日乾燥ができました。

③ ゴミ

台所から出る厨介は大八車に箱を付けた収集車が振鈴を鳴らしながら回ってきます。各家庭からゴミの入った馬穴を持ち出して車に入れたり、その他のごみは再利用出来る物は廃品回収業者が何時も回って来てましたので殆ど始末が尽きました。(図-7)

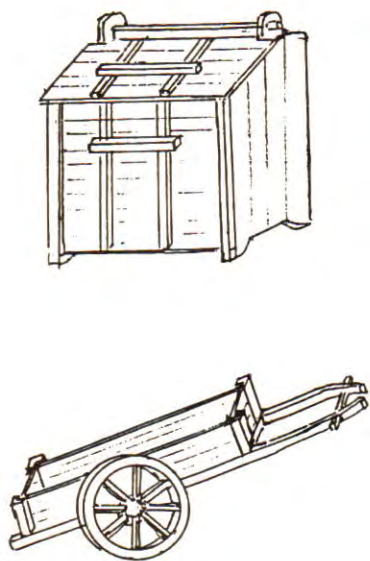


図-7 ゴミ箱と収集車

残りのゴミはあちらこちらに、木製コンクリート製のゴミ箱がおいてありまして、毎日のゴミはいれて、或程度になりますとゴミ収集車が回ってきまして整理しますが、間に合わないときは道路で燃して灰を戻しておいて回収に来た時に処理していききました。

#### ④便所

便所は汲み取り便所で、使う紙は現在のようないレットペーパーではなく殆んどの家では新聞の切ったのや「クロチリ」といって黒っぽい再生紙が大半で「白いチリガミ」を使うのは余ほどの家でした。汲み取りは昔は効外の農家が集めに来たようですが、昭和の始め頃には東京市の清掃部門で大八車に肥樽を乗せて集めにきました。

便所は殆どが裏側にありましたので人がやっと通れるぐらいの狭い幅ですから空のときはまだ良いのですが荷を一杯入れたときは、相当苦労して運びだしてしまいました。汲み終わりますと「今日は一荷とか一荷半」とか言われ買い置きして在った汲み取り券を渡しました。

#### ⑤風呂

内湯のある家は、大きな商店や屋敷構えの大きな家に在った位で、普通の住宅や商店ではそんな場所もなく、大半の人が銭湯に行く習慣が在り一つの社交場になって

いました。

午後になりますと近所の子ども達が誘いあって大勢して銭湯にいき二時間も三時間も桶に乗って遊んだり、桶に手拭を掛けて石鹼を塗せて泡出し競争をしたりして大人に怒られながら遊んだりしていました。

外で遊んで泥だけになって帰りましたときなど家にいれて貰えず、その尻石鹼と着替えを持されて銭湯にいきました。入口に番台が在って湯銭を払ったり、石鹼や手拭を忘れたりしますと買ったたり常連ですと借りたりしましたが、殆どが常連ですから子ども達は後で持って来ますと言えはその假はいれますし、時に依って月払い、季節払いする家もありました。

以上、簡単に概略をお話しましたが、いずれにしても此の辺一体は江戸の下町と山手の中間の商住混在の地域で永く住み着いて来た家が多く、住んでいる人達もそこそこ『遠くの親戚より近くの他人』の言葉通りの生活環境でした。

## 討 論

稲場 昔の良さっていっぱいあるでしょう。そのうち、今でも活かせるものってどんなものがあるんでしょうか。技術的な面と、社会的な側面とに分けた時。僕は今四十六ですが、三十年ぐらい前にはまだあったと思うんです。家にだってカマドがあったし。熊井先生は、もうちょっと前のことも当然体験されているんですけど。何か、今でも残したい部分がたくさんあると思うんです。どんなものが残せるのでしょうか。

熊井 一つ気がつくのは、この当時から比べるとモノの使い方がお粗末ですね。

稲場 浪費するという意味ですか。

熊井 あんなにゴミを出さなくても済むんじゃないかと思うんです。もったいないと思いますね。特にディスプレイなんやかやったら、もっと酷いと思いますね。昔は、そんなこと絶対になかったですね。

藤森 米の研ぎ汁を何かに使ったことがありますよ。アク抜きか何か。洗面器か何かに取っておいて、物をつけてアク抜きしたような気がしますね。

西村 灰はつかったんじゃない。

藤森 私が残したいのは、どの家でも日課というのがありますが、あれを今うちの子供らには必ずやらせているのが二、

三ありますね。便所や玄関なんて、挟いとはいえクツを脱ぐ場所があるわけです。隣の家まで掃くとか。自分ですら道路がありますが、その道路を隣の家まで掃くとか。自分で食べた茶碗は、朝学校に行く前に洗ってしまえと。

稲場 それはそうだな、そのくらいのは実際できるな。食器は洗わないまでも、流しに入れていくとか。

藤森 ああいう習慣がなくなってから、町の中が汚れた気がしますね。

稲場 本当、甘やかしすぎることは、すぎているね。

熊井 ゴミでも何でも、行政が集めるのが当然だという言い方ですよ、今は。それで集め始めれば、無料になったらすごい量になった。だからよく言われるのは、ゴミの量を減らすには、有料にすれば半分になると。タダのために、かえって高くついている。

藤森 石油缶一本をガソリンスタンドで買ってきて、家で燃えるゴミはそこで燃やしますし、菜っ葉のしっぽなんかは畑を借りてそこに捨てるようにしています。一挙両得ですよ。

(笑) 多摩ですから、そういうことができますけれど。

熊井 町の中では、燃されると洗濯物が汚れるから。そこで、燃せばゴミが片方では減らすつもりでやっていますが「スス」の問題がある。

福田 燃す時間を決めてやれば、いいですよ。洗濯物が

出る前とか、取り込んだ後とか。そういうちよつとした工夫で。藤森 朝と夕方、風がちよつと止まる時があるんです。そういう時に燃やせばいいですよ。煙が真っ直ぐに上がっていきますよ。

稲場 だけど、なぜ家庭教育とか社会教育という部分がなくなつたんでしょうかね。

熊井 塾に行けとか、勉強しろとか、親の注意がそっちへ行っているんですね。エスカレーター方式の中学に入れとか、それが親孝行だとか。

西村 最初に言われたけれど、冒頭に思うのは結局それなんですよね。ああいう構造自体が、人間をそこで育てて、しかも当時の人間が豊かだとするとではあれから何を学ばばいいのかと思つたんですよ。

熊井 精神的には、たしかにこの時代は良かったんですよ。子供は放りだしても、かならず何かあると周りが見てくれましたよね。たとえば子供が怪我しても、子供同士もよく知っているし、すぐ家に連絡が入る。だから、僕らも昼飯というのは自分の家で食べる率は少ないですよ。平気で隣の人に上がり込んで、お茶碗を出してくるでしょう。隣の人家にだって、家に来たらそうなんです。みんな。七五三をやるのうと、誰か着物持っていないかという到着物がそろってきて、

千歳飴をちゃんと持たせて行かせちゃうんだから。それでニコニコして帰ってくる。そういう生活です。だから、どこの家の子供でも平気で怒鳴られましたよ。悪いことすると。よその家の子だから知らん顔しているなんてことなく、悪いことすると危ないぞと怒鳴られましたよ。地方に行けば、まだそれがあるんじゃないですか。都会は会話がまったくなくなつていいいますね。

藤森 今私は東京へ出てきていますが、一つはそういう近所付き合いの煩わしさから脱脚するために都会に来ているというのが、銀行か何かの調べでありましたが、そういう煩わしさはないですね。隣が全然知らない。そういう付き合いがなくなってきたということ、もう一つは熊井さんが言われたように、これしろあれしろと親父に言われて、そういう辛いことは子供にはあまりやらせたくないという面があるんじゃないかということ。

もう一つは、やらせようという親父も忙しくて、昔みたいに家にいて子供のことを一々注意している時間がなくなっちゃった。家内も働きに出るようになってるし。そうすると、帰ってきても子供は一人ですね。寝転んでテレビを覗いていようが何しようが。そんなこんなで、消えてしまったのではないかな。

稲場 だけど、実際に日課というのは義務でしょう。本来、

義務としてやらないといけないことでしよう。そんなものはあつていいと思うんです。下水道を使う人たちだつて。それを全部、引き受けているわけでしょう。本来、義務としてやらなければいかんことを全部引き受けているわけです。けど、それでいいのかなというところで、割り切ったらまたそれでいいのかな。そこが、何となく割り切れない、多少古い人間は割り切れないんですよ。かえつてそれで悪くしている面も、あるんじゃないかという気がしますね。煩わしい部分というのは、日課なんて皆煩わしいですよ実際。だから、煩わしい部分がなくていいのかなという気がするんです。

熊井 ある老人が、マンションを持ったんです。年を食つてそんなところへ行かなくていいじゃないかと言つたら、その人はそんなことないんだと。はじめて分かつた、鍵をガチャンと掛けたらどこにも行けるんです。何も煩わしさを考えなくて済む生活つて、はじめて分かつた。こんな気楽なことはないよというわけ。煩わしくなつたから、マンションに入つてカギをかければ気楽なんです。

稲場 だけど、その結果、四十日も五十日も死んだのが分かんなくて、白骨で出てきた人だつているわけです。ね時には。そんなのがいいのかなという気もするね。

照井 私はそのマンションに住んでいますが、やつと下水道が引かれまして、浄化槽から下水道に変わったのですが、

浄化槽時代は、しょっちゅう故障するんです。何が故障の原因かというと、下着だとか生理用品とか何でも浄化槽に流すんです。これじゃ故障するのが当たり前だと業者の人に言われたんです。

あともう一つ、年に一べんの清掃会つていうのがあるんです。二百世帯あるんですけれど、集まる時は十人なんです。それしか集まらない。管理費を納めれば、管理人や業者がやつてくれるものだという意識がありますから。しょっちゅう、浄化槽は故障する、清掃会はそのような状況だし、あまりにも無責任だと思つているんですが。

熊井 金で始末する、すべて金で解決する。

稲場 たとえば汚れているから掃除するでしょう。掃除が嫌だからしてあげるでしょう。そうすると、もつと汚れるというね。また、掃除をする。またもつと汚れる。だから、掃除しないほうがいいのかななんていう場合もありますよ。掃除するとかえつて汚れるといつて。いかなのや、そういうのは。(笑)それから、人の仕事を取り上げるとかいつて、掃除する人はこの人と決まっているのだから、掃除なんかすることないんだとか。これまたいじましい人もいるわけだ。お金で何でもカタがつけられると思つているわけだ。とにかく、金の時代になつたわけだ。

熊井 子供に掃除させるでしょう。やはり汚れなくなります



よ。汚れたら、自分たちが掃除しなければならなくなるからだから、片づける所に片づけてしまつて、怒られないようにするのが一つと、あと掃除が楽でしょう。

福田 今、その逆があるんです。たとえば、毎日家の周りを掃除しておくんです。そうすると、家のそばにある社宅があつて出勤の持ちょうど私の所でタバコを一本吸ひ終わる。掃除をしておきますと、吸殻がないんです。捨てにくい。ところが、それを怠つておきますと（笑）そういうところもあります。

稲場 なるほど、それはそうかも分かりませぬね。良心的な人は、捨てにくいでしょう。（笑）

熊井 雪なんかふると、まったく雪かきをやりませぬよね。一生懸命雪をかいてる人もあるし。昔だったら全部、雪かきして真ん中を通れるように、朝起きて黙つて皆やつたんです。通勤途上の親父さんがやっている暇はないですよ。お母さんは、子供を送りだした後パートに出るなんていったら、時間的な余裕がないかもしれないですね。時間に追ひ掛けられていると、優雅に雪かきをやっていられないと、年寄りの仕事になってしまうですよ。

稲場 熊井先生が言われたように、掃除でも子供にさせると汚さなくなるという事です。だから、下水なんかでもあまり一軒一軒まで汚水ますをつけてやらないほうがいいのか

なども思っているぐらいです。極端な話、一ブロック単位ぐらいで汚水ますをつくつて、その後、中は勝手に管理しろと、そのぐらゐのかなり荒く、そして所々に大きな溜水ますでもつくつて、そこから上は皆あなた方の領分だというようにしてしまつてあれば、かえて汚さないのかもしれないと思つたり。今は、全部入れるでしょう。精々、ますは二軒に一個くらいでしよう。そこまで公共で掃除するでしょう。そんなにしないでいいじゃないか、なんていう気がしますね。

熊井 し尿に対する感覚が違うのかと思うんだけど、今まで雑排水でよその家通つている時はあまり文句言わない。今度、下水が入るようになったら、オレのところにも他人のし尿が流れるのは嫌だ、いい機会だから、切り換えてくれ。こういうのが結構あるんです。雑排水の時はいいけれど、この際だから今度生し尿が流れるのだから、オレの所流しては嫌だ、折角下水が入るのだから、一軒ごとにしてほしい。し尿の問題は難しい。

稲場 なるほどね、それはあるかも分かりませぬね。

熊井 雑排水なら、それは問題ない。し尿なんかでも、大体中年以上の人は、特に年寄りは地下に流すのに反対しますね。稲場 それは、日本人に根差した気持ちでしょうかね。し尿を忌み嫌うというのは、昔は使っていたものね。誰のし尿でも、なるべくたくさんし尿を集めたがつていたのに。ついこ

の前までそうだったようですけれど、それが今、忌み嫌っているというのは、どうしてかな。やはり、元々嫌だったのかな。

熊井 昔は、共同井戸も共同便所というのも、いくらもあつたわけですね。

西村 そこでもう困ってしまふんですね、どういう理解をすればいいの。

藤森 私が都営住宅に入った時に管理人をしていましたけれど、排水管も上から下までつながっているんですね。一番下の人が、詰ると困るわけです。自分のところが溢れてくるから、誰かが流したのだから、共同責任で全部費用を均等に割れというと、駄目なんです。詰まって溢れた人が払えということなんです。

熊井 じゃ、被害者が全部、修繕まで被害ということになるんですか。

藤森 上の人は知らん顔している。管理人だから、しょうがないから上から下まで集めて、こういうわけだといってようやく。下にいる人が泣きついてくるわけです。家だけで何万円も払うんですかと。

だから都会へ来て、人は人、オレはオレという感じになりたくて来ている人も結構多いから。だから、そんな人のものまでという感じですね。

稲場 話はちょっと見間違いになるかも知れないけれど、都市の人間の質が三十年ぐらい前と今と大分違うような気がするんです。大体人口だつてものがすごく増えているでしょう。ですから三十年ぐらい前の都市に住んでいた人、これは大体田舎から出てきて、田舎というのを知っている感じがするんです。

ところが、三十年ぐらい前に田舎の人が都市に住んで子供ができるでしょう。その子供は、都市しか知らないわけです。時々、親父の実家に帰って田舎の様子を垣間見る程度しか知らないでしょう。本来、農村出身の一次世代、それと都市しか知らない二次世代というのがあるとすれば、二次世代の連中がものすごく増えている。おそらく、大部分そうじゃないかという気がするな。僕なんか、どっちかという二次世代だな。家の親父は田舎から出てきて、京都市の真ん中にいますけど、僕はそこで生れてもう四十六でしょう。戦後の人は、ほとんど二次世代じゃないのかな。そんな気がしますよ。

そうすると、五十歳以下の人が二次世代だとすれば、五十歳以上ぐらいの人がようやく田舎のことを知っているというような状態じゃないですか。だから、糞尿に対する気持ちなんかも変わっているのと違うかなという感じがしますね。

福田 元々嫌なものだと。

稲場 水洗便所じゃないと用が足りないという子供が増えて

いるというでしょう。

西村 三宅島が、こっちから行く人が皆そうだって言っていましたね。できないって。

稲場 そんなの、おそろしいことだと思ふな。自分の出したものがその場で見えるようなものでしょう。それは平気なんだけど。まだ深いほうが、見えないのでましたという考えもあるかもしれないけれど。

熊井 たしかに、保育園でももらすんだそうです。汲み取りの場合、嫌がって入らないで、我慢してもらすんだそうです。浄化槽を設置すると、もらす回数も減る。昔の汲み取りだと、お手洗いに行きたいんだけど我慢して、ギリギリまでやろうとしない。で、間に合わなくて洩らす子が多い。だから今は保育園や幼稚園をつくる時は、どんなに無理してでも浄化槽をつけるそうです。保母さんがまいつちやうそうです。

稲場 ですから、煩わしいような関係とか日課というものを下水道に持ち込むこと自身が、中年以上の考えなんです。年取ったものの、という気がしないでもないね。だけど、それがどうかは別ですけれど。

西村 そういうことだね。

稲場 川だって、本当に川で遊んだ子供はそんなに多いのかという気がするんです。僕ら子供のころは、川といえる川がありました。だけど今、東京の子供で川と言えるのは、多摩

川なんて川かな。東京の子供なんて可愛そうですね。

西村 多摩川の上流に行かないと駄目ですね。

熊井 新聞でよんだんですけど、都会の川を蘇らせようという運動をやっているでしょう。都会に代々住んでいる人たちが、川で遊んだ記憶がないって。川との生活というものは、ほとんどない。だから、「カムバック サーマン」と言っていた、感覚が湧かないらしいです。だから、ああいう運動をやっている人たちはほとんど地方から出てきて、子供の時分にそういう所で育った人のほうが運動として熱心だそうです。昔の、子供の時分の思い出があるから。これをやってみたいという気になるでしょう。ところが、都会に代々住んでいる人というのは、川に対する感覚が全く違う。運動にも参加しない。

稲場 そういう連中というのは、大体、親父の代で親父さんの親つまりお爺さんが亡くなって実家へ帰るに帰りにくいということになる、故郷と切り離されるわけでしょう。そうすると、二次世代というのは東京なら東京しか知らないわけですよ。そこが故郷なんだから。そうすると、その川しか知らない。そこは汚れているのが当り前と。

西村 魚も釣れなければ、中へ入ることもできない。

稲場 だから、今から五十年ぐらい先になったら、おそろし

い人間が増えていますよ。恐ろしいかどうかは別として、どういったらいいのか西洋的なやつばかりかもしれないよ。ヨーロッパ人みたいな。(笑)だから、その時代には下水道はいいのかもしれないね。今の下水道とちがって。

西村 そうか、それがいいのだということになっていくのかね。

稲場 それで育つわけですから。そして、それに対する批判の目というのを持たないわけでしょうから。

西村 たとえばハンバーグ一つとっても、ハンバーグは何が入っているか分からないままで成長してしまうわけですよ。下水道だってそうですよね。どこへ行っているか分かりませんと。

稲場 どうして、そんなに煩わしいこと言うんだろなんてなっちゃうでしょうね。流れるんだから、いいじゃないかと。西村 どこで、どうなっているよといじやないかとなるんですかね。

稲場 そして、日本国中に都市人口が八十%になって、田舎の連中も彼等と呼んで生活していこうと。お金を落としてもらおうということになると、日本中みな水洗便所と同じようになりますね。

西村 そこで稲場さん、クエッションマークがつくでしょう、やはり。

稲場 若干、つきますね。

西村 つくんですよね。だからさっきの熊井さんの話の中でも、結局そういう生活パターンが人間を育てたわけでしょう。とすると、では当時は今ももう数十年たっています。では人間は進歩しているのだと。いわゆる人間の成長過程からすれば、進歩していることになっているわけですよ。では、現状、進歩しているとすれば、自分のものも知らずに何も知らずに、そういう所で生活したのが人間が成長したとなると

ちょっと引つ掛かるんですよ。成長ととらえれば。熊井 第二世代が、第二世代と呼ばれた時から、そういうものだという生活に慣れてくれば、われわれが子供の時分にやっていたことはその前の人はまたさらに違った見方をして

いるかもしれない。だとすれば、それで文化都市だという感覚を持てば、第二世代がそういうことなのだ小さい時からとらえてしまえば、昔の話というのは物語にしかならないんです。

西村 そうなりますね。とすると、ではその現状を、過去の歴史から学んだとすると、現状を見た場合に喚起することは必要なのかということ。(笑)ちょっとキザかな。と、思っただけです。

熊井 当然だという認識をもってしまえば、無理して元へ戻す必要があるのかどうか。

稲場 そこなんです。

熊井 それに合わせたやり方をせざるをえなくなるんじゃないかな。

西村 とすると、戻すというよりも、もちろんそれを昔に戻すということではなくて、その中身の中から、何かあるのではないかとそれを模索するほうが、過去の政策的にやるのではなくてもうちょっと前向きの問題提起というか、問題喚起というのがあっていいんじゃないか。

熊井 昔はこうだった、世代でこう変わってきてしまった。

今さら元に戻すっていうのは、世代でこう変わってきてしまった。今さら元に戻すっていうのは、そこが課題だと思いますね。

西村 ただ現状のままずっと行くよりも、そろそろ問題提起というか、喚起があつていいんじゃないかと思うんですよ。

稲場 多摩川でも丹波山村にしても、小菅にしても公共下水道をつくっているでしょう。あれは、皆、東京の人が来るからというのが大きき理由ですよ。水洗便所でないと来てくれない。東京の人は皆、水洗便所で生活している。今、東京都の下水道普及率は八十%ですね。そんな状態では、子供たちが来てくれないということでしょう。それが大きな理由です。そうでなければ、何で奥多摩湖のためみたいなもののに、金を使うかというのが人情だと思ふね。地元からすれば。だから水道局がお金を出してくださるから、作ろうかと踏み

切った理由はそういうことでしょう。ずっと上の塩山のほうだつてそういうことをしたい人の施設がいっぱいある。

西村 この前の多摩川サミットの時も、塩山の市長と山梨の副知事がそういつていました。われわれは、都民のために働いているんだ。お金をもってこいと。年間経費は莫大なものだ、億に近いと。東京都から何も入ってきていない。

そういうのがあるわけなんです。そうやって考えると下水道でも、今のままを続けるとすると、せめて子供の教科書の中に入れるとか、あるいは実地見学を義務付けるとか、そういう一方の活かし方があるじゃないかと。現代的に言えば、施設をつくったとしても、どこかで見るものが一回は必要で

しょうと。感受性が豊かなうちに。そういう二十一世紀に向けての問題提起は必要かなと、逆に思えてくるんですよ。

稲場 何か、都市に住んでいる人たちの内容というか、構造が変わっているから、そういうレベルから物事をみたら、どうしたらいいのかということが気になるね。

藤森 私は、十八まで長野県にいてこっちへ出てきて、今振り返ってみると田舎の良さ、悪さを比べてみて、良さのほうが多かったように思うな。自然との触れ合いがあるから、自然というのは黙っていると、仕返しをきってしまう。そういう部分が、今、都会に自然がなくなつてしまつていますよね。それを人工的でもいいからつくつて、たとえば親水公園をつ

くって、落葉がそこに引っ掛かってしまうと水が流れなくなってしまう。それは皆で掃除するというのを、雨水の浸透させようとすれば、目詰まりしないように皆で注意しようじゃないかと。

そういう自然のサイクルの中で、都会といえども暮らすことにしない。でないと、ヘタに子供に注意すると、われわれの頭が狂ってしまったのかと思われる。なぜかというところはゴミ屋がくる、水だつて下水に流せば糞も一緒に流れてしまう。浸透させてなっていくと、反発ばかりになってしまふ。ところが、こういうわけだからやらなきゃいけないのだと。

稲場 それは同感。

熊井 逆に、一通りの装置の見学は大体してあるんです。問題は、そこで何を説明してるのか。今の説明は、たとえばゴミだつたら、何でも捨てられますという説明になってくる。

下水処理場は、何でも流せますという説明になっている。だから、流せるけれど、君のやることは何かという説明をどこかでしてもらわないことには、今の状況はもっと悪いほうにいくんじゃないか。

稲場 ですから、できるだけしてもらおう事を楽しくとか、意味があるようにしたいものです。せめて、楽しいとか役に立っているという気持ちを感じさせるようにしたい。ただ、

つくってサービスしているというだけではなくて、それもいんだけど。だからといって、日課だよ、業務だよというところ反発されるわけだから。何か、やったら楽しいとか、何かもらえるとか。人間って何かもらったらうれいから、バッチでもあげるとか。ただ、楽しいとか得したという気持ちがあつてもいいような気もするし、ここは難しいですね。

熊井 たしかに、行政がこういう立派な施設をつくって、いいものができて、皆さんの生活はこんなに便利になったのだという説明です。トップのほうがそうです。市長にしても私がこういう施設をつくったとか、良くした話しかしない。それをさらにもう一歩突っ込んで、だけどへんな使い方をしたら駄目になるぞという話は誰もしない。表側のきれいな部分だけ聞くから、何でも流していいんだ、ゴミは出せば行政が責任をもつていってくれる。そういう感覚で育てられれば、十年、二十年と育てられれば、それが当たり前のこととなつてしまふ。

もう、飲料水がなくなるよと。汚れてしまつて飲み水がなくなるのだから、水が飲みたければ、まず下水を浄化して川を綺麗にしようよと。伏流水も、地下浸透して、地下水を増やしてそれで始めて飲み水ができるんだよと。逆の発想です。あなたち、それができなくなるんじゃないかというぐらいに。これは時間をかけて、いっぺんにやると問題がありますから。

そういう発想の転換を図ってしまったでもいいんじゃないかという気がします。

稲場 下水の場合なんか、処理場があつて幹線があるぐらゐの範囲までは、絶対に必要だといえると思うんです。個人がいて、取りつけ管が出ます、そして本管だとすれば、本管と個人の間あたりのところがどうしたらいいのか、そここのところがよく分からないんです。僕は、そんな気がしています。下水道は必要なものであることは、間違いないと思うんだけだ。(笑)

熊井 今までの説明だと、都市には環境整備で下水道は絶対に必要だと。疫病もなくなり良くなります、良くなりますという宣伝はしていたと思うんです。だから、設備ができればオールマイティだ位の説明位しかしていない。ところがオールマイティじゃないです。使い方によっては駄目なんです。そのへんを、もうちょっとこれからやる必要があると思いません。

さっきの話で、浄化槽に平気で異物を流し込んでしまう。雑巾なんかありますから、落として知らん顔している。蓋をあけて、ゴミをどんどん流してしまふことをやっているわけですよ。あれは、個人の財産で自分のものだったら、絶対にそうしなないと思いますよ。共同になればなるほど、そのへん感覚が薄くなつてしまつてあとはどうにかなつちや

う。

稲場 僕は、環境基準などでもやはり時代に合わないなという気がするんです。環境基準というのは、河川の本川だけを相手にしている気がするんです。住民の人と、本川の間を結ぶところの、いわゆる小支川の網の部分の環境基準が、本来はEランクならEランクだよ、十PPMだよと僕は思いますけれど、あまり誰もはっきり言っていない気がするんです。たとえ、面的には全部十PPMだよと。あるいは、もっと敵しくてもいいかもしれませんが。そういうように、と

もって小支川なんかでも、面としての環境基準があつてもいいと思うんですけれど。そういう基準を決めたら、下水道が普及しすぎるんですね。(笑)下水道をつくれれば、Eだつて達成できるんだから。ゼロになつてしまふわけだから。これもまた、今度は、量の問題もあるような気がします。何か、環境基準などでも片手落ちのところがあるような気がしますね。熊井 今の環境基準は、水質達成の目標がこうだと。ただ、各個人が流す水質には何も関係してないんです。その接点は何かといつたら、早く下水をいれる。下水に流せば、雨もどンドン流してしまふ、汚水もどこか一箇所に集めて流してしまふ。山の木は、皆切つてしまふ。山の木は、懐の都合が

あるから皆、杉や檜でしょう。山が荒れてしまつて浸透水がなくなるわけです。川に何を流すんです。下水で皆持つていつてしまつて、水質基準どころかどこから川に水を流す方法はありませんかと考えざるをえなくなる。

稲場 家庭から出てくる雑排水は、今の水質検査だと百二十PPMだと。そしてそれは、規制できない。ですから面的に網としてEランクだよなつていつたら家庭から十PPMにしてださなければいけない。

熊井 川の汚れは企業だというのが根強いんですよ。自分たちが流しているのが一番汚しているのだということには、一部の人たちしか気付いていない。だけど、大多数の人は流れてどこかへ行つてしまえば終わりと。昔の企業性悪説で、すべて公害は企業が悪いと。今はそうではなくなつてしまつています。ところが、その声は上がらないで、川の汚染は家庭の責任だという声にはならない。

稲場 だけど、そこまでいくと厚生省が合併浄化槽の運動をやるうとしてゐるのは、成功しませんよね。本来、日課としてやらなければいけないことをはつきりさせないと。

下水道というものも考え直さないといけないと思ひますよ。別に、いわゆる公共下水道のようなものだけが下水道じゃないような気がするんです。

熊井 種類をもつと増やせばいいんじゃないですか。ここは、

こういうやり方です。大きいところは、こうやります。分散したところは、こうやります。それを全部トータルで考えるのが下水道ですと。

福田 数年前に建設省でマップをつくつたのですが、あの先を期待してはいたんですけど。あれを国としてどういうふうにしちんと整理してやるか、そこにいくと思うんです。だけど今のところ、私も全部読んでませんがあの時のデザインが今ちよつと見えていない。この点の大部分はカバーできると思ふ。

藤森 あのをデザインするのは、行政でもかなり基礎的自治体の下水道職員が地域のボスたちとの話し合いができないと、できないんじゃないですか。それには、今都会に来てみて田舎との違いは地域の活動が全然されていないということですね。ですから、行政マンでそこまでやるうとした人がいたとして、まず地域をまとめる話の場をつくる、それからやらなきゃいけないです。そのバイタリティを持っている行政マンはなかなかいないんじゃないですか。

稲場 いわゆる、新しい行政マンだな。住民とともに歩むような行政マンでなければいけない。

熊井 住民に言われるのではなく、こちら側から問題提起をしながら、住民を引きずり込むやり方を行政マンは、これからやらなきゃならない。言われて、そうですか、では施設を



造りましようというのではなく、こういう施設を造ればこうなります。皆さんの生活はこうなります。それには、皆さんもこうなります、こういうことをしてくれなければ駄目です。それを将来を見越してやるかやらないか、皆さんの判断ですよぐらいのぶっつけをして盛り上げていく。

稲場 行政マンの再教育として研修の場の対策ですね。(笑)  
藤森 それにはさっき言った、福田さんや稲場さんが言ったような、地域をどうするか、稲城市なら稲城市をどうしようかという議論をする場はあるんですけど、その中の部落、十戸、二十戸の町内会、あるいは大字でもいいです、そういう所へ言って自治会長に話せば浸透するかという、なかなか輪番制で来た役員はしょうがなくてやっているから、配るだけです。たしか二十人ぐらい自治会の役員がいるんじゃないかと思っても、精々寄ってきて五、六人ですから。そこで議論したって、あれは一部の好きな人がやっているだけだということまで終わってしまっているわけです。このメンバーの中でも、地域に帰って自治会活動の場がない人が多いです。

(笑)

田舎へ帰ると、そうじゃないです。地域の人が皆寄ってきて、去年の役員と違うんだけど、今年はどうしたらいいでしょうかと。私なんかずっとお寺をやっているから。出てこない、あそこの家は確か昨日まであそこへ行っていたから、

今は松本市へ買物に行っているかも知れないと。ところが、こっちで自治会を開くと、何だか忙しいと言っているけど、本当に忙しいのだからさぼってしまっているのか訳が分からない。

熊井 それは分かるんです。自治会の役員は、昔は土地にへばりついていてから、活動したんです。今は、今年はどうもない当番だから、一年間無事に過ごしてバトンタッチしてしまえ。難しい問題は、全部先送りとなってくるわけです。そういう中で地域活動を活発にしようたつてできないし、最近、子供が保育園にあがるようになってくると、そのお母さんたちだけのつながりだけでしょう。学校のつながりだとか。それが亭主同士のつながりに進展しないです。

藤森 PTAに行ったら旦那さんは来ないから、お母さんたちだけなんです。お母さんたちだけっていうのは、目先のことはよく分かるけれど。

稲場 それともう一つ、河川だろうと思う。水辺環境をつくるでしょう。下水道だけでは駄目だと思う。綺麗であるほうがいいですよ。だから、汚いほうだけ押しつけるのではなくて、汚いものをやるのは、綺麗にするためにやるのだということが分かるようにするには、綺麗なものも一緒にやるほうがいいね。そういう意味で、これからの行政は難しいけれど、下水道だけでは駄目だと思う。やはり川ですね、下水道

の場合は特に河川とドッキングですね。

西村 東京だってある、いいんじゃないですか。

稲場 できる所からね。急にいろんなところでできないから。だから、例の野川へ水を返す、あれなんかでも川と一緒にやったらいいと思うんです。ちょっと薄めたら、川の水になっちゃうんだから。

熊井 そうなると、下水という名前は悪いですね。トータルにもの考えると、下水というものじゃない。下水というから汚れた水しか考えないんです。だけど、基本的には本川以外の水路を取り込んで考えるということが増えてくると思うんです。水路の改修とか、そういうものも含めてトータルにやる。そうなると、下水という名前ではなくて、何という名前になるか分からないけれど。(笑) 下水から始まったけれど、水はみなやらざるをえないという時代になってくるんじゃないかな。それがうまいかかないと駄目じゃないかな。

稲場 住民の方を誘い込もうと思っても、汚くてという、だけど日課だよ、義務だよと。これをやったら、あなたは誠実な人だとか、義務感が強いとかそういう言葉だけでしよう。下水に適当な美しい言葉を探したら、義務とか、誠実とか、犠牲とかそんな言葉だけでしよう。類似したような言葉だけです。だけど、今、こんな言葉だけで人を呼び込めるかと思うんです。あなたは、犠牲的な人だなど。犠牲的精神と

いうのは、いいですよ。だけど、そんなことを自らそれだけのためにやってくれるような者というのは、まずいない。生活のためならともかくとして。

だからここに、もう少し美しいものを予想させる、楽しいというか、そういう言葉に馴染むような仕事が必要です。だから、下水道の美学というのはどういうことが言えるのかという、やはり犠牲、義務、誠実です。真実一路みたいな、シンドイ。肩が凝ってくる。そういう言葉だけだということに気がついたんです。もう少し、肩をほぐすようなものを下水道の中に入れないと。そうしたら、おそらく下水道と叫ばないね。

西村 トータル発想になると。

熊井 楽しみながら、やる。

稲場 下水道だけ切り離れた、肩の凝るようなことでは駄目なんです。そんな気がする。

西村 展望がないんですよ。普及率百%、さあどうしましようという発想だ、まずいんだ。そしてすぐ維持管理と、パターンは決まっちゃってしまっているんです。

稲場 再生でしょう。蘇らせる。所詮、綺麗になっても再生なんですよ。

西村 だから、展望が非常に限界なんです。広がりがありませんよ。

熊井 今みたいな行き方はそれとしてこれから先、今のよう  
な条件ではよくない。

稲場 だから、悪くいったら差別されるわけですよ。

西村 現にそうだ。ある所へいったら、事務所が離れている  
とか。

熊井 もうちょっと、皆が喜んで仕事をしていけるような下  
水道は何かなど。多少、夢と希望があるような。それに乗るよ  
うな夢をださなければ、駄目だな。そうすれば、多少金が高  
くても夢があれば、しょうがない金を掛けて下水を早くやつ  
ちやえという話になるかもしれない。多少料金が高くても、  
しょうがないとか。

西村 百五十円のコーヒーを飲むよりも、四百円でもしよ  
うがないという人がいるわけだから。

熊井 四百円を気持ちよく出させるようなものをつくればい  
いんだから。

西村 すごい発展だろうけど、本当にそうなっていかなけれ  
ばまずいんですよ。それで市に指導ということになるわけ  
でしょう。

熊井 そうでないと、袴を着てやったってね。

西村 義務行為、義務行為じゃね。

熊井 家の前には、かならず道路があるんですから。側溝に  
かならずせせらぎを流すと。そうすると綺麗でしょう。掃除

しなければ汚れるし。それが難しいんですよ。三月まで津和  
野のような清流を地元につくろうと画策したんですが、まっ  
たく進展してないんです。金のかかる話と、人が来たら掃除  
が大変だ。出入口を制約されるんじゃないか。自分たちは、  
好きに建物を直したり入口を広げる、それができなくなる。

大変だというんです。それに便乗して、行政が一方的に押し  
つけたと裏でやる人がいる。実は、旧甲州街道に残っている  
んです。消防水利で、川から清流を引いているんです。そう  
すると、水源石積はそのままにして皆が排水勾配をゆるくす  
れば津和野のような親水水路ができる。その案を出したら、  
とたんにやられちゃったんです。私が転勤することになって  
この仕事を引き継いできたら、皆、尻つぼみで面倒くさいか  
ら止めた。両方ともおかしくなっちゃった。予算まで  
取ったのですけれど。残ったのは、そこに放す予定の金魚と  
コイだけが処理場の中で泳いでいるんです。そのための魚を  
饜するから、金をくれと行って予算を先に取ったんですが、  
片方が駄目になってしまいました。

稲場 社会的な熟度がそこまではないのですかね。少し早  
いのかね。

熊井 今度は、躍らせなきゃ駄目です。楽しませる。

稲場 問題は、核心に入っていますね。これは、一番重要な  
課題の一つになってくるのではないのでしょうか。

下水道を、質的に変えていこうというようなことだし。あ  
りがとうございました。

（昭和六二年十二月一九日、日本下水道協会会議室にて）  
著者の現職・前職

現在、日本下水道事業団研修部教授。前八王子市下水道部長。